

e-dream-s 通信

No. 93 発行：2008年11月9日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

来年2月に行なわれる Cam TESOL、そして、いよいよ本格的に始まるカンボジアでの教育支援事業についてお伝えします。サンフランシスコからは旬の話題、大統領選挙についてです。どうぞお楽しみください。

目次

- | | | |
|---|-------|-------|
| 1. 晴時々曇り、体感温度38度 | 中川 房代 | p. 2 |
| 2. 人生の結論 | 辻 荘一 | p. 3 |
| 3. イタリア好み：軽薄な憂鬱 | 井川 好二 | p. 6 |
| 4. CamTESOL 2009 へ | 塚本 美紀 | p. 11 |
| 5. 再び、真臘の地へ | 仙崎 裕右 | p. 12 |
| 6. <サンフランシスコ便り 13>
“Yes, We Can!”の瞬間 | 山田 昌子 | p. 14 |



山田昌子氏撮影

晴時々曇、体感温度 38 度

中 川 房 代

立冬を過ぎて、昨日今日は急に気温が下がっている。今の大阪の天気は曇、気温 10 度。家の中にも、何だか肌寒い。つい先日までは半袖でも、と思うような日もあったのだが、時は確実に冬に向かっている。

あっという間に、新年まであと 2 ヶ月。この期間を新たなプロジェクトの準備期間として有効に使っていかれたらと思う。

さて、その 1 つはカンボジアでの教育支援事業；「Scholarship for English as a Global Language Education in Cambodia (SEEC) 英語教育奨学金」の設置である。カンボジアで何か教育支援事業ができないかと昨年度から調査に着手し、今年 2 月と 8 月の 2 回、e-dream-s の代表がカンボジア訪問を行った。その中で英語教育奨学金プロジェクトの可能性が見えてきた。英語をもっと勉強したい生徒に対して、辞書や英語教材の購入、語学学校の授業料など英語を勉強するための費用を援助しようというものである。対象にする生徒の年齢や奨学金の金額、地域の選定等、私たちだけでは決められないこともあり、今後、ソコム先生や関係者と相談しながら、概要を考えていく予定である。加えて、日本でカンボジアなどへの教育支援、奨学金の運営を行っている団体や人がどういう支援を行っているか、どんな方法が適しているのか、など、日本で情報を得ることのできる項目もある。こちらにも調査を進めていきたい。

まだ、プロジェクトとしては具体的になっていない面も多いが、2009 年夏に要項をまとめ、2010 年秋には第 1 回の奨学金給付が始められるよう、計画を立てながら進めていきたいと考えている。そして、この奨学金が、カンボジアでの英語教育の発展、またカンボジア社会への貢献に繋がるようにと願う。

2 つめは、上と関連するが、来年 2 月カンボジアでの第 5 回 CamTESOL¹（英語教育の研究発表会）での発表の成功である。第 5 回大会は“The Globalization of ELT: Emerging Directions”をテーマに、2 月 21 日（土）・22 日（日）の 2 日間開催される。前日の 20 日には、公立学校、語学学校、NGO プログラムの視察を行う Site Visit も予定されているようである。

私たちは、今年 2 月の第 4 回大会で 2 つの発表を行い、それを契機に教育支援事業の端緒を掴むことができた。来年の第 5 回大会に向けては、3 つの発表を応募し、先日、3 グループともが選考されたとの連絡があった。詳しくは、この通信の塚本理事の報告にあるので読んで欲しい。大会まであと 3 ヶ月少し、各グループで準備を進めていくことになる。3 つの発表のうちの 1 つは、ACROSS の発音訓練をカンボジアでやろう！という参加型のワークショップだ。カンボジア人英語教師がどんな反応をするのか、などなど楽しみ盛りだくさんだ。

¹ 情報は、CamTESOL のサイトに掲載 <http://www.camtesol.org/index.html>

カンボジアを近くに感じるようになり、テレビで「カンボジア」と聞こえると気になるし、ふとした瞬間に“カンボジア”を思い浮かべることがある。ネットで見ると、今日のカンボジアのプノンペンの天気は「晴時々曇、気温 31 度、体感温度 38 度」とある。むちゃくちゃ暑い！

私たちの熱い気持ちも、きちんとした形にしていくべく、準備を進めていこうではないか！

人生の結論

辻莊一

母親は80歳。自ら望んでの独居老人である。独居老人とはいいいながら近くに住んでいるので母親も交えて家族一緒に食事をすることも多い。たいがい誘いは母の方からである。もっとも母にとっては食事ではなく孫の顔を見るのが主たる目的である。だからはじめは孫の大学の話などを聞いたりしているのだが、結局大体いつも同じ思い出話になる。そして最後の結論は必ず同じである。「わたしも、ようやくたなあとと思う。長崎から出てきて、なーんも知らなかったのに野村証券につとめて京都の街を歩き回ってなあ。ばあちゃんを30年以上見て、子供3人育てて、ほんまにようやくたなあとと思う。」たぶん百回以上聞いた同じ話に、おぎなりに聞こえないように相づちをうつのはなかなか難しいが私も53歳、そのあたりはそつなくこなすのである。

いつも同じ話ばかりする母に対してもっとなにか新しい話はないのかと思った時期もあったが、最近では仕方がないだろうと思っている。80歳を過ぎれば人生も新しい展開をすることはほぼないと言って間違いない。そもそも人生の新しい展開というのが若い頃ならともかく80を超えてから起こるのが、良いことなのかどうかも分からない。病気や事故などの不幸な展開ということも十分考えられる。だから80歳の母が同じ思い出話ができるのは幸せなことだと言っているのだろうし、同じ話を聞かされる息子もそれを幸せと思うべきなのである。そして「わたしもようやくたなあと」という人生の結論をもって同じ話をする母のほうが、過去の不幸をほじくり返して愚痴を言う母より千倍もいいに決まっている。

考えてみれば、アンナ・カレーニナの有名な書き出し「幸福な家庭はすべて互いに似かよったものであり、不幸な家庭はどこもその不幸のおもむきが異なっているものである」を思い出すまでもなく、あるべき人生の結論は決まっているのである。「いい人生だった。生きてきてよかった。」これに決まっている。どんな人生を送ってきたとしても、「不幸な人生だった、生まれて来なければよかった」という結論を持って死にたいなどとは誰も思わないのである。

だとすれば、80までにはまだかなり間のある私の人生だって結論は決まっているのである。また結論の決まっている人生はつまらないか、というとそんなことはない。結論をはっきりさせてから話し始めるスピーチが、退屈だとは限らないのと同じように、結論の決まった人生だって十分楽しめるのである。そしてスピーチの説得力が結論を支えるエピソードで決まるように、人生の充実度も結論に至るまでの生き方で決まる。

さて、アクロス発音訓練のカンボジアでの発表も正式決定し、イー・ドリームズのカンボジアでの奨学金の話も具体化がすすんでいる。私が将来子供たちに嫌がられながら何度もするであろう人生の思い出話に、カンボジアの話が混じっているといいなと思っている。そして結論はもちろん決まっているのである。

イタリア好み：軽薄な憂鬱

井川 好二

「今のうちに、円をユーロ²に換えといた方がエエ」

「そうですか」

「だって、去年の年末にフランスへ行ったところ、1ユーロ 170 円もしたのに、今やったら、120 円くらい。エライ円高のユーロ安や」

「ホンニ、久しぶりのヨーロッパ。お土産たんと買えますな」

「愉しみにしてるで」

「センセは、もう何回も行ってはるのに」

行きつけの割烹の女将が、年末年始をイタリアで過ごすと言ふ。小金持の叔母のお供だと云うが、昨今の円高ユーロ安で、ミラノやローマでのショッピングに、拍車がかかりそうである。

女将が「お待っとうさま」と運んで来たのは、黒塗の秋草碗。蓋をとると、湯気と柚子の香りの中に、蟹の真薯³。車海老と芽葱が添えてある。寒くなると真薯にかぎる。「お酒にしはりますか？」

「八海山を冷やで」

「イタリアか、ええなあ」

「去年、フランスへ行かはったやないですか」

「初めての海外、イタリアやってん」

「おいくつでした？」

「二十歳」

「青春どすな」

「なんで知ってるん？」

「ええ？けど、なんでイタリアどしたん？」

「別に、偶然や」

最初に訪問した外国がイタリアであったことは、単なる偶然だと人には云うが、その結果を考え

² (euro)EU加盟国のうち 13 カ国 (2007 年現在。ベルギー・ドイツ・ギリシア・スペイン・フランス・アイルランド・イタリア・ルクセンブルク・オランダ・オーストリア・ポルトガル・フィンランド・スロヴェニア) の法定通貨。その基本通貨単位。1999 年帳簿上の通貨として導入され、2002 年紙幣と硬貨の流通が開始。記号€ [株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

³ しん-じょ【#薯・真薯】魚・鳥・蝦などの肉のすりみに、すった山の芋・粉類を加えて調味したもの。蒸しまたはゆでて使う。[株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

ると、二十歳の偶然が後の人生に必然的な結果を生んでいると云わざるを得ない。蓋し、私のイタリア好みである。あるいは、その二十歳の偶然を齎した必然と云うこともある。

最近はや食が増えたが、外食をする際、根っからのイタリアン好き。大阪、神戸、京都以外にも、東京や福岡の街でも、美味しいリストランテやトラットリア⁴を何軒か知っている。

それに、二十歳のイタリア訪問が単なる偶然とばかり云えないのは、女友達が、ローマ留学中であつたこと。アリタリア航空で降り立ったローマのレオナルド・ダ・ヴィンチ空港で再会した。しかし、その彼女とはそれっきり。

私のイタリア好みの原点はいくつかある。しかし、イタリア料理を例外として、そのどれもがそれほど、現実的なものではない。大学時代に耽溺した本と映画は、イタリアものが多かった。

まず、塩野七生⁵の『チェーザレ・ボルジアあるいは優雅なる冷酷』(1970年)。大学時代の愛読書の一つ。単にタイトルに痺れていただけとも云えるが、イタリアン・ルネッサンスの優雅と冷酷に惹かれた。イタリア語を本格的に習おうと思ったこともあつた。



ジャン・リュック・ゴダール監督「軽蔑」(原作アルベルト・モラヴィア)

⁴ trat·to·ri·a: n. pl. trat·to·ri·as or trat·to·ri·e. An informal restaurant or tavern serving simple Italian dishes. [Italian, from trattore, host, from trattare, to treat, from Latin, tr#ct#re; see TREAT.] (AHD)

⁵ 塩野七生(しおの ななみ、1937年7月7日 -)は、東京都出身の作家、小説家。女性。「七生」の名は、7月7日の「生まれ」であることに由来する。

東京都立日比谷高等学校、学習院大学文学部哲学科卒業。1963年からイタリアへ遊学し、1968年に帰国すると執筆を開始。雑誌『中央公論』掲載の『ルネッサンスの女たち』で作家デビューを果す。1970年には『チェーザレ・ボルジアあるいは優雅なる冷酷』で毎日出版文化賞を受賞。又同年から再びイタリアへ移り住み、その後イタリア人医師と結婚(後に離婚した)。イタリア永住権を得ており、現在もイタリアの首都・ローマに在住。出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

次に、現代イタリア作家のアルベルト・モラヴィア⁶。耽読したのは「倦怠」、「無関心な人々」「軽蔑」。重苦しい不条理観と息苦しいエロティシズムが、思い出しても生々しい。

高校、大学時代、映画館に足しげく通っていて、イタリア映画はよく見たものである。ジャン・リュック・ゴダール⁷が監督をした「軽蔑」(1963)は、ブリジット・バルドー⁸主演。無論ゴダールはフランス人だが、「軽蔑」はモラヴィアの原作であった。もちろん、ブリジット・バルドーの映画が観たかっただけとも云えるが。



ルキノ・ヴィスコンティ監督「ベニスに死す」

イタリア人映画監督で云えば、ルキノ・ヴィスコンティ⁹。その貴族趣味とデカダンスに感じ入る。作品では、「ベニスに死す¹⁰」(1971)が好きだった。トーマス・マンの原作で、主演はダーク・

⁶モラヴィア【Alberto Moravia】イタリアの小説家・批評家。現実に密着した心理的写実派。ブルジョア社会の退廃を冷徹に描いた「無関心な人々」のほか、「ローマの女」「関心」など。モラーヴィア。(1907～1990) [株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

⁷ゴダール【Jean-Luc Godard】フランスの映画監督。ヌーヴェル・ヴァーグの旗手。作「勝手にしやがれ」「気狂いピエロ」「中国女」など。(1930～) [株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

⁸バルドー Bardot, Brigitte [生] 1934.9.28. パリ：フランスの映画女優。1950年代初めから映画に出ていたが『素直な悪女』(1956)で世界的スターとなり、以後反道徳的な役柄と性的魅力で人気を得た。主演作品『気分を出してもう一度』(59), 『真実』(60), 『私生活』(61), 『ラムの大通り』(71)。【ブリタニカ】

⁹ビスコンチ Visconti, Luchino [生] 1906.11.2. ミラノ[没] 1976.3.17. ローマ：イタリアの演出家、映画監督。演劇、映画で活躍。映画作品としては、第1作目の『妄執』 Ossession (1942) 以後、ネオレアリズモ映画の代表作『揺れる大地』 La Terra Trema (48), すぐれたスタイルの『夏の嵐』 Senso (53), 『ベニスに死す』 La Morte a Venezia (71)などを発表した。徹底した時代考証と、官能的な映像で、死後も崇拜者は絶えない。舞台ではシェークスピア、ゴールドーニ、コクトー、サルトル、アヌイ、A.ミラー、T.ウィリアムズらの作品を演出した。【ブリタニカ】

¹⁰ベニスに死す Der Tod in Venedig ドイツの小説家トーマス・マンの中編小説。1912年刊。ベ

ボガード。自分自身のこととしては、無縁ではあったが、ホモ・セクシュアリズムの感受性に、共感する自分があるのに驚く。

「センス、随分オマセやったんどすな」
「オマセて・・・」
「けど、エロティシズムとホモセクシュアリズム、どっしゃろ」
「まじめなもんよ」
「けど、退廢的どすなあ」
「そうかな？」
「ウチなんか、二十歳ゆうったら、そら、おぼこ¹¹おしたえ」
「嘘ついたらアカン」
「ホンマどす！それに、可愛かったんどすえ」
「・・・」

ベニスにはまだ行ったことはないが、機会があれば是非にと思っている。それに、最近入れあげている随筆家、須賀敦子¹²の「ヴェネチアの宿」を読んで以来、ますますベニス訪問へ気持ちが傾いている。須賀は、ベニスのホテルで、泊まるホテルにうるさかった父親のことを思い出す。

しかし、イタリア映画と云えば、その頃も今も、最も気に入っているのは、フェデリコ・フェリーニ¹³の作品。イタリア精神の頹廢を描くと云われるフェリーニの作品中、「フェリーニのローマ」(1972)は何回も観た。「甘い生活」「サテリコン」と並んで、フェリーニの「ローマ三部作」の一つと云われている作品。マルチェロ・マストロヤンニ¹⁴の演技が光る「8 1/2」も好きだが、歴史が幾層にも重なるローマの多重性と、その娼婦のような魅力に耽溺する。

ニスを訪れた初老の作家が、美少年のとりことなってコレラが流行しているこの地にとどまり命を落す。美の魅力にとりつかれた人間の運命を描いた芸術家小説。71年 L.ビスコンティによって映画化された。【ブリタニカ】

¹¹ 世間をよく知らず、すれていないこと[明鏡国語辞典]

¹² 須賀敦子（すが あつこ、1929年1月19日 - 1998年3月20日）は随筆家・イタリア文学者。出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

¹³ フェリーニ **【Federico Fellini】** イタリアの映画監督。第二次大戦後の社会の繁栄の中での精神の退廢を描く。作品は、「道」「甘い生活」「8 1/2」など。（1920～1993）

[株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

¹⁴ マストロヤンニ Mastroianni, Marcello [生] 1924.9.28. フォンタナリリ[没] 1996.12.19. パリ：イタリアの映画俳優。家具職人の子として生れ、当初建築を学ぶが第2次世界大戦に従軍。戦後演劇に関心をいただき、ローマ大学付属の劇団に参加。やがて L.ビスコンチ監督に見出され 1947年『レ・ミゼラブル』で映画界にデビュー。60年 F.フェリーニ監督の『甘い生活』で作家くずれのトップ屋を演じ、一躍ヨーロッパ映画界のスターとなる。【ブリタニカ】



フェデリコ・フェリーニ監督「フェリーニのローマ」

「文学とか映画とかのお話、センスの口から始めて聞きました」

「そうかな？」

「いつも、そんなお話、避けたはるでしょ？」

「バレたか。あんまり藝術の話はせんようにと思てる」

「なんでどす？ウチに云うても、分かれへんからどすか？」

「ちやうちやう、恥ずかしいのと忙しいのと・・・」

「けど、たまには、藝術のお話もしとおくれやす」

「そやなあ、藝術の秋やし」

「また、そう云うて、ごまかしはる！」

秋の夜も更けて、冷気が少し。青春時代の藝術談義を、蒸し返して、粹がるつもりはないが、忙しいを口実に、映画も観ない生活では、創造性が枯渇する。

「お酒、爛にしましよ、センス」

たまには、軽くて深いイタリアンな時間を、愉しみたいものである。

(Sunday, November 9, 2008)

CamTESOL 2009 へ

塚本美紀

カンボジアで食品会社を営む友人の S さんが、現在日本に帰国している。2つの大学で講演をするためだ。そのうちの一つは共通の友人である K さんが教鞭をとっている大学で、「女性と仕事」というテーマで話をしたそうだ。K さんによると、講演は学生たちには大好評で、聴けなかった学生からは自分たちも聴きたかったとの声があがっているとのことだった。先日、講演を聴いた学生たちの感想を見せてもらった。

「その時実現できなくて、遠回りをするようなことになっても、それは全て今後のためになるんだという言葉は、とても支えになった。」

「思い通りの環境でなくても、いかにそこを自分で前向きにとらえ、生きていくかが大切なんだと思った。」

「直感とチャンスを大事にして、いつまでも夢や挑戦を続けられる人間でありたい。」

「自分のやりたいことではないことでも、いろいろな経験をすることも無駄にはならないのだということを今日の講演を聞いて改めて思いました。」

感想文を読んでいると、S さんがこれまで、人のご縁を大切にしながら、紆余曲折がありながらも、自分のやりたいこと、すべきことに真摯に向き合ってきたことが、学生さんたちにきちんと伝わっていることを感じる。彼女は、これまで人生の先輩方にたくさんのアドバイスやパワーをいただいたので、今度は自分よりも若い人たちに少しでも役に立てればと、日本でもカンボジアでも、若い人に向けて、忙しい仕事の合間をぬって多くの講演を行っている。

来年の2月に行われる CamTESOL 2009 では、e-dream-s から応募した3グループすべてが発表できることになった。これから本格的な準備に取り掛かることになる。発表のタイトルと発表者は以下のとおりである。

(1) Professional Development Needs of Cambodian Teachers of English: International Comparison with Japanese and Korean EFL Teachers

Dr. Koji Igawa and Ms. Naoko Tsujioka

(2) From ABC to XYZ: Phonetic training for non-native teachers of English

Mr. Shoichi Tsuji, Ms. Yoshiko Kawano and Ms. Hiromi Inagawa

(3) Using Skype to Connect a Classroom to the World: Providing Students an Authentic Language

Experience within the Classroom

Ms. Miki Tsukamoto, Mr. Brian Nuspliger, and Mr. Yusuke Senzaki

e-dream-s のカンボジアでのプロジェクトが、今まさに始まろうとしている。CamTESOL への準備と平行して、学校教育支援に向けて、私たちは第一歩を踏み出そうとしている。S さんが学生たちを勇気付けたように、私も自分の教室の生徒たちや周囲の後輩たちが元気になる話ができるよう、このプロジェクトを通して経験を積んでいきたいと思う。同時に、このプロジェクトが多くの人々にとって、そんな経験の「場」になることを願っている。

再び、真臘の地へ

仙崎裕右

今年の夏休みは、本当に忙しかった。今年からテニス部の主顧問となってしまう、夏休みの間も毎日のようにコートに顔を出すことになってしまった。もっとも、中学時代に軟式テニスの経験はあるが、運動音痴な私にはまともな指導はできないので、文字通り、コートに「顔を出す」だけだが、公式戦ともなると「監督」の名のもと、ベンチコーチに入ることもあった。じりじりと地表に照りつける夏の太陽に焦がされるだけで、何も監督らしいことはできずに終わり、ともあれ、夏休み前半はお盆まで出勤する羽目になり、超文科系人間を日焼けさせるだけの日々となった。

また、夏休みの後半は、当時直前にせまった修学旅行の担当者として、しおりの原稿を書いたり、業者や利用施設との打ち合わせに忙殺された。この夏休み、与えられた夏期特休を使っただけで、休暇を1日もとっていない（休日出勤の振り替えはとったが）。

ともあれ、これまでになく忙しい夏休みであったことは間違いない。しかし、だ。何か足りない。去年や一昨年よりもっと、色々なプレッシャーや締め切りやなんかでもっともっと追い込まれていたような、もっと充実感というか、「何かやっています」感があつた。それが、このクソ忙しい中、あまり感じられない。その理由に思い当たる最大の場面が8月30日のe-dream-s総会の日であった。

アクロス、e-dream-sメンバーと久々に顔を合わせる日であるが、そういえば、いつもよりブランクが長い。(アクロスの)同じ級の仲間があわただしく報告の準備をしているのに、この日は1日ボーっと過ごしていたような気がした。上に書いたような理由で、E C A Pに参加しなかったこともあり、7月半ばからACROSSやe-dream-sの活動にはほとんど関わったという実感がないのである(もちろん、実習や訓練はあつたので全く何もしていないわけではないが)。特にこの2年、E C A Pの実行委員として何か動き回ることに体が慣れてしまっている。そうか、これがなかったんや……。妙に寂しさを感じた1日であった。

実際、当時の自分の状況に余力があつたかと言われると、なかったのが正直なところである。何も準備せずに「英語村」に旅行に行くのならいざ知らず、研修として参加するにはさまざまな準備をし、帰ってからいろいろな仕事をこなさないといけない。やっぱり、それだけの余裕はなかった。でも、学校に振り回されながらも、この膨大な負担がなかったことが、これだけの喪失感を与えるとは……。イカンイカン、すっかりヤキが回ったようだ。

夏休みのぽっかり空いた穴を埋めたくなくなったこともあり、今回、CamTESOL2009の話があつたとき、迷わず乗ってみる気になった。今年2月にCamTESOL2008に参加させていただいて、充実した数日間を過ごすことができたし、塚本先生のご尽力でSokhomさんという貴重な人材とつながりができ、順調な一歩が踏み出せたことが大きい。夏休みの間に、あつという間に彼女を足がかりにして、カンボジアには地雷以外にも大きな可能性が埋まっていることがわかり、この

プロジェクトが大きく膨らんだことも魅力を感じた理由である。

その後、出願・準備期間が過ぎ、無事に発表ができることも決まった。二度目のカンボジアがぐっと近づいてきた。後は、直前で自分のクラスが危機的状況に陥らないように気をつけてケアしていかないと……。出揃った2学期中間テストの惨憺たる結果を眺めながら冷や汗を流しているところである。

1月号の「e-dream-s 通信」¹⁵に、1人のバングラデシュの男の子の里親になったということを書いた。正確にはNPO法人「ワールド・ビジョン・ジャパン」¹⁶という組織の募集する「チャイルド・スポンサーシップ」に参加しているのであるが、この組織がカンボジアにも支援を行っている。この国でも貧しい地域であるウドンの村で支援を受けた女性が来日し、支援が与えた環境の変化などを語るという。12月に神戸で行われるこの報告会¹⁷に顔を出してみるつもりである。

¹⁵ <http://www.e-dream-s.org/enews-200801.pdf>

¹⁶ <http://www.worldvision.jp/index.html>

¹⁷ ワールド・ビジョン・カフェ (http://www.worldvision.jp/news/news_0281.html) 同じ趣旨の報告会は東京でも行われる。

“Yes, We Can!”の瞬間

理事 山田昌子

“I cannot believe how nervous I am about this election. You would think that I was running.” African Americanの友人Pさんが大統領選挙の日、こんなメールを送って来た。オハイオ州出身のPさんは、幼い頃、自分より少し年上の黒人の少年が白人の女性にからかいの言葉を発し、翌日殺害され川で発見されたことにショックを受けた。女性の夫と親戚の男性が怒って殺害したらしい。言葉数は少ないが、それ以来African Americanということで様々な思いをしてきたと想像できる。奴隷制度が始まって以来、African Americanがアメリカ大統領候補になるなど誰が予想しただろう。だから、たとえ選挙前日までObamaが大きくリードしているとメディアで報道していても、複雑な思いで一杯だったらしい。

“What a historic night!” 最初のAfrican Americanの大統領誕生を、サンフランシスコの多くのテレビ番組が報道した。私の部屋のテレビはケーブルテレビと契約していないため、最低限の8局しか映らないがそれでも6局がこの話題。サンフランシスコ時間で午後8時すぎにチャンネルをつけた。

McCain氏のスピーチの後、Obama氏のスピーチ¹⁸が行われた。日本でも報道されたと思うが、Obama氏のスピーチで私が素敵だと思ったのは、多くの人たちに支えられてきたが、特に思い出されるのは106歳の黒人女性Ann Nixon Cooper、というくだり。年齢からわかる通りアメリカ歴史の生き証人のような人。車も飛行機もない時代に生まれ、若い時はふたつの理由で投票ができなかった：ひとつは女性だという理由、もうひとつは肌の色という理由で。彼女は、最高の時も暗い時も、様々な時代を見、経験してきた。出来ないと言われて来た時代から“We Shall Overcome”の頃を経て月旅行やベルリンの壁崩壊、・・・そして今日彼女は投票をした。彼女はどのようにアメリカが変わってきたかを体験してきた。今私たちは出来るようになったんだ！（Yes, we can.）そしてアメリカはこれからも変わっていく・・・。

控えめな語りの中にも「さあ統領として頑張るぞ」という抱負に満ちたスピーチ、“Yes, we can.”というフレーズを何度もいれ、未来への希望を感じさせるスピーチ。アメリカの歴史の変わり目に、アメリカに滞在しているというのは何とも不思議な感じがする。

一方、カリフォルニアのもうひとつの投票は、5月に最高裁が認めたsame-sex marriageを禁止するProposition 8¹⁹。結果はYesが52.5%で、same-sex marriageは否決された。こちらの方は、Yes, we canまではもう少し時間がかかりそうだ。

¹⁸ <http://www.cnn.com/2008/POLITICS/11/04/obama.transcript/index.html>

¹⁹ 電話帳程のぶ厚い冊子にカリフォルニア、サンフランシスコ両方で30位のpropositionsが書かれていて、国民はそれを予め読んで、各propositionに賛成か反対か国民投票するそうだ。結果は、<http://www.sfgate.com/election/races/2008/11/04/>

編集後記

よりよく生きたい、自分の人生を充実させたい、みんながそうはっきり意識して毎日
を生活してわけではないけれど、今月寄せられた原稿には、視点が違っても、そんな共
通した思いが感じられた。元気が出た。（岡田）